

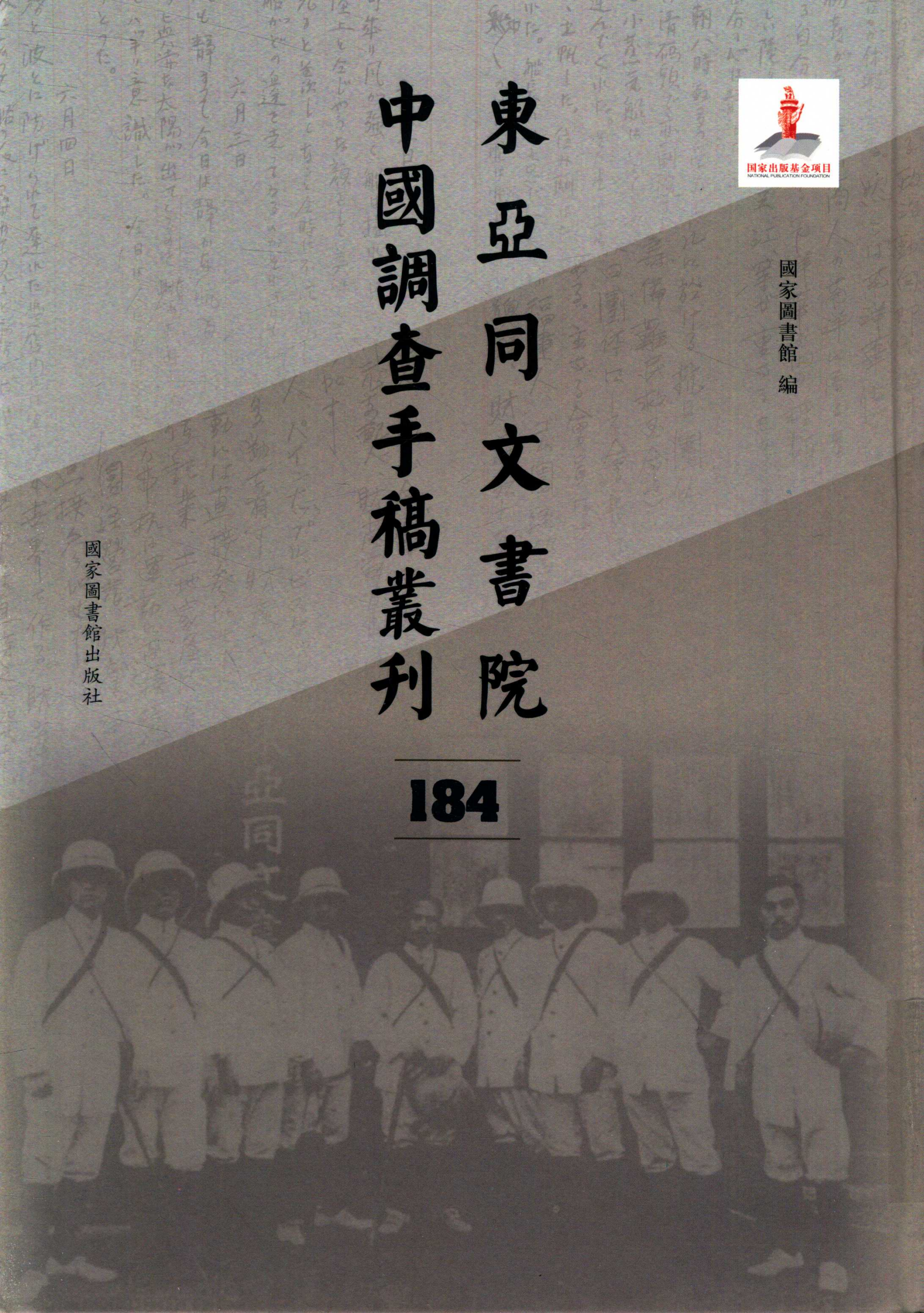


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

184

國家圖書館出版社





国家出版基金项目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

184

國家圖書館出版社

第一八四冊目錄

昭和十六年（一九四一）調査報告（第三十八期生）

武漢工業調査

武漢工業調査 小澤潤一郎 一

湖北省漢陽縣縣政調査

湖北省漢陽縣縣政調査 宮坂喜雄 八九

武昌縣の縣政に就いて

武昌縣的縣政 三枝重雄 一四三

武漢地區の交通に就いて

武漢地區的交通 友野裕 二二三

武漢三鎮に於ける主要工業調査

對武漢三鎮主要工業的調査 安藤健吉 二七三

武漢を中心としたる湖北省教育調査

以武漢爲中心的湖北省教育調査 橋本清 四〇五

漢口地方の物資交流と合作社に就いて

漢口地區的物資交流與合作社 窪田元次郎 五二五

昭和十六年度

武漢工業調査

第十九班

小澤潤一郎

武漢工業調査報告

小澤 潤一郎

序論

目次

第一章

變遷前に於る武漢の湖北省至清の地位

第二章

事変前に於る武漢工業

第一節

概況及全支に於る地位

第二節

外國資本侵入の程度

第三節

武漢工業の特質

第三章

事変による破壊状況

第一節

一般破壊状況

第二節

工場破壊状況

第四章

武漢工業の復興状況

第五章

戦後武漢工業の特性

第一節

田中工業力進出と民族資本工業の進出並に第三國人工業の沈滞

第二節

企業形態の特異的發展

第三節

生産設備の脆弱性

原料

燃料

動力

東亞同文書院長學生調査大旅行指導室

第六章 現地軍官民の復興方針並に動向及復興途上の諸問題

序論

本論文に於て武漢工業の事変前よりの觀察より、事変後の変化、及び復興状況、及び全支那の觀見より之を詳さに見て行かんとする企圖を有するものである。武漢工業の変遷を詳さに檢討するとは又取りも直さず支那現代工業のモデルを提供するに他ならぬ。即ち一々には現象的把握を、他には或程度の歴史的究明、及び他との比較対照を必要とすると言ふ意見から、武漢工業の生成状態を其の沿革より見て行かぬはならぬと思ふのである。以下以上の事を紙上の許す限りに於て

出来るだけ簡明に示さうと思ふ。
先ずその沿革に就て見よ。漢口は宋時代より商業繁盛
なり。が、清朝初期以来二百余年間に市内愈々繁盛に赴き
咸豐八年英支天津條約の結果、開港場となり、貿易の端
緒を開き、其後同治十年日英通商條約なり、前後四
十年間に十七ヶ国と通商條約なり、列国との感情關係が
逐年密度を増し來つた。武昌は大体政治的即ち軍政的中
心地として、感情的には漢口のそれに追隨して來たもの
である。漢陽も亦軍事上の重要地であるが、近來軍政の
影響甚だしきこと、武昌と軌を一にしたものであり、至

濟的には古都であつた關係上、商業的に可成の繁栄を呈
 してゐたが、近世に至り漢口に奪はれた。然しその地理
 的條件の爲軍需工場として事變當初迄支那近代機械工業
 の先驅をなしてゐた。
 以上は三鎮の沿革を概述したものであつたが、此等變遷の
 程中十八世紀の末葉中乃至十九世紀の初期から欧米人の
 來集頻りとなり、列國の資本主義の浸透激しく、他面湖
 広總督張之洞等の至當宣しきを得たは爲り、古來より九省
 の會とされてゐた。支那大陸の最中心地武漢の地は愈々
 其の本來的自然條件に近代の至海防の構成を具するに至

り、無限富源を駆て世界の近代産業場裏に登場し來した
 のである。以上を以て大体の沿革を見たが、次章より本
 論に入る。二と、す。

第一章 事変前に於て武漢の湖北省と清の地位

武漢三鎮は往昔から五方雜処、或は九省の會と稱せら
 れてゐたが、近年京漢、粵漢兩鉄道の開通は常に九省に
 止らず西北、西南は勿論殆んど全支大陸の脈絡し、支那
 の心臓部を形成するに至つた。即ち西北は漢水を通つて
 陝西、甘肅の一帯に連絡し、京漢線によつて北支に及
 び、東は長江に沿ひ、江西、安徽、江蘇、浙江並に国外

には、南は洞庭湖を越えて湖南、広西、貴州に連り、粵漢
 線によつて、広東、広西に通じ、南は長江により四川、
 康西、西藏に連絡してゐる。
 而して之等広漠万里の背後地域は、長江の流域は勿論
 のこと、北黃河流域、南珠江流域に至る殆ど全支の沃野
 を抱擁してゐるので、此の地に産する絶大な農産資源
 を動員することによつて武漢の地は上海、天津、青島、
 広東と共に全支屈指の大商工業の中心地を形成し、世界
 の商業舞台に登場してゐるのである。
 然し近年の急増状況は、奥地疲弊に因り購買力の衰退

、北支特殊貿易及密輸入品の南下圧迫、或は幣制改革に
 基く為替垂化等により、減退の一途を辿つたが、昭和十
 一年の農産物豊収は、俄然武漢兩工業界に活況を齎した
 のであらう。因に武漢産業の戦後関係は、殆んど農業を恃
 圖である。戦後地の豊凶如何は、直ちに武漢産業に重
 大影響を及ぼし、商業上に於ては購買力及農産物の出廻
 減退して貿易を不振ならしめ、又工業に於て其の生産能力
 を閉塞して予ふ故に、武漢市場は常に戦後地農産物の豊凶
 に一喜一憂を領たれど、此である。

此等地域より武漢に上流の各交通路を至て集散せられ

し物資は豚、豚毛、豚腸、羊皮、禽毛、桐油、茶葉油、
 生漆、藥材、食塩、五倍子、穀米、麦、雜糧、蓮実、茶
 、生絲、繭綢、棉花、麻、石膏、水銀、アーク、
 タンク、ステン、マンガ、石炭、木材等にして、凡そ支
 那土産物の大部分が出廻つたといつても過言ではなく、
 その繁栄を記はれ、先述の如く常に九省のみでなく、江
 漢を緯とし、粵平を經とし、全支の心臓部と云はれてゐ
 たのであつた。

第二章 事変前に於ける武漢工業

第一節 概況及び全支に於ける地位

第一節 搬次及全交仁於地位

先和武漢工業の發達史を概観すれば、支那開港前に於
 て其の封建的社會が育成した工藝技術が可成高度の發達
 を遂げてより、武漢の地も亦、南港後程重要な地位は占
 めてゐなかつたが、五方雜處の要衝を以て、南北の文明
 相會してゐる關係上、其工業は黃河沿江の南化地域に附
 随して来た。然るに開港前後に西欧を席捲したる産業革
 命の潮流が漸次支那沿岸を洗ふに至つて、清末の朝野を
 大いに刺激し、遂に支那近代工業に黎明を招きし、先ず
 軍器工業の輸入に始まり、次第に製造工業が展開されて
 行き、武漢も亦大勢に附随し其の商業的地位加重と共に

工業も亦次第に突展の方向を辿つた。
次に支那近代工業の突展過程を年代別に表けして置く。
に次の通りである。

年代	突展形態	突展地域	業態
第一期 自一八六二同治元年 至一八八二光緒七年	軍器工業	上海、安慶、蘇州、福州、天津	砲銃及自彈丸、軍艦製造
第二期 自一八八二光緒八年 至一八九四一二十年	官商商品工業	上海、廣東、武漢、蘇州、天津	紡織、金屬、造幣、燐寸
第三期 自一八九五光緒二十一年 至一九一五民國四年	内外工業勃興	上海、天津、武漢、蘇州、無錫	紡織、穀類、煙草、硝子、セメント、金屬、屬造、珐瑯其他一般
第四期 自一九一六民國五年 至一九三四一二十年	工業旺盛期及變動期	上海、天津、青島、無錫、武漢、廣東	一般

以上の如く、支那近代工業の突展は主として、支那内地及び其の周辺に於て、
外國及び其の資本によつて、育

成用突された為、即ち五大開港場に偏倚集中を達し、自
 然的結果として、半殖民地的性格を負荷された。而
 して武漢近代工業の勃興は上海其他海岸線開港場に稍遅
 れて、第二期には極めて寥々たるものがあつたが、第三
 期に入つて、先ず外國資本工業が大いに勃興し、次いで
 其末期に至つて、世界大戦の好影響を捉へて、民衆資本
 工業が著しく抬頭し、遂に支那屈指の大工業地帯を形成
 するに至つたものである。
 而も此の發展過程に於て三度、其完成後に於て二度、
 武漢工業は致命的大打撃の洗礼を受けてゐる。即ち大平